opusdei.org

生きる力を育む教育

子育る教ととている親が語話に続きで思いる教生をして、教生でのますが思いている教生をでいますがあるととでいますがあるととでいまがでいる。一くないでは、一くないでは、一くないでは、一くないでは、一くないがない。

2023/06/05

若者たちを一人前に育てていくとい うことはとてもやりがいのある仕事 です。これは神様ご自身が親となる 人たちに託した仕事ということができます。繊細さと同時に力強さを要求する仕事であり、忍耐、喜び、そして当惑する数々の出来事に満ちているもので、度々私たちは神様に心を向けながら、光を願う必要があります。

教育という什事は、子供たち一人ひ とりが持っている潜在的な能力を十 分に引き出し、それを完成へと導い ていくという、ほとんど芸術的とも 呼べるものです。それはたとえば、 他者のために心を砕くことの大切さ を子供たち自身が発見することを手 助けすることであり、本当に人間的 と言える関係性を築き上げていくこ とができるように教えていくこと、 そして人生を賭けるような大きな約 束(コミットメント)を恐れない胆 力を鍛えていくことなのです。つま るところ、私たち一人ひとりの人生 に神様が持っておられるご計画に子

供たちが応えていくことができるように育てていくことなのです。

周囲の環境がもたらす困難や、好ましくない状況は常にあるわけですが、それを踏まえた上で聖ホセマンアは、子供たちの素晴らしいあるをいまうな夢の数々をでは突拍子もないような夢の数々がでは、親である人たちが常に、親である人たちが常にといました。

時代はどん変わっていきます。 私たち大人にはとても好きになんにはとても好きな新たなことがた客観とさんにはことが客観といます。中になってはいいます。中になったませんには認います。というないもない。それは時代が変わらは、それは時代以上であるに、ちょっとした見方のは、ちょっとした見方のは、ちょっとした見方のは、ちょっとした見方のは、ちょっとした見方のは、ちょっとした見方のは、ちょっとした見方のは、ちょっとした見方のは、ちょっとした見方のは、ちょっとした見方のは、ちょっとした見方のは、ちょっとした見方のは、ちょっとした見方のは、ちょっとした見たます。 とユーモアで克服できるにも関わらず、些細なことをさも重大なことであるかのように捉えて生じる衝突で $\mathbf{t}^{[1]}$ 。

本文書が前提とするのは、まず、会に改善して、これできるというものでいたがでいるというものでいたがでいるが、完璧な教育とができる教育とができるがでいたがでいるがある。「生きる人をできるがでいるをできるがでいるとでいるとではない。

威厳と自由

教育を担う親たちが、幸せを快適さ ということと混同し、自分の子供た ちがあらゆるものを手に入れること ができるように、できるだけ心地良

自分自身との戦いや努力は、成長 し、成熟し、自分自身の在り方を確立し、その在り方に従って自由に生 き、あらゆる外的な影響に押し流されてしまわないためには、必要不可 欠なことだと言えます。

カトリック教会の公教要理は、人間 が置かれている現実的な状況や人間 本性が傷付いていることを考慮に入 れないことは、教育においてとてもせたることを思いてとなることを思います。原罪とそれが残したままである。 原罪への傾き、あるとの関での必要であるとのも身に勝つるとのものものものものものものものものものものものものものものにいてもないです。

教育するということは、さまざまということは、さまざるということは、させるということはできまる。我慢、動勉、忠さ、忠さ、忠さ、明徳を身につけるを身にしているのであるとがいるということがはいってきまとがはない。 を行うことがはいるということがはないないであるとがはないないないない。 を行うことがはいるということがはいるともたがはないたいたいたいたいたいたいたいたいた。

ちに動機づけしていくこと、でも、 失敗した時には大袈裟にしたりドラ マチックにしたりすることなく、経 験を積んだのだというポジティブな 見方を身につけさせていくことで す。高い目標を設けることを奨励 し、そのために必要な努力を肩代わ りしてあげたりしないことです。そ して、何よりも、子供たちが自分自 身に厳しく要求し、戦うことを恐れ ないように助けていく必要があるで しょう。自分自身に要求すること は、それ自体が目標なのではなく、 親の目がないとしても正しく行動で きることを学んでいくための手段で あることを彼ら自身が理解しておく 必要があります。

子供、あるいは若者は、さまざまな 義務が持つ意味についてまだはっき りと理解することができていないも のです。経験不足というやむを得な い事実を補完するために、彼らには 確かな支えとなる助けが必要です。 信頼関係に基づいた上で、彼らに威厳を持って教えてくれる親や先生たちが必要なのです。そして親や先生が忘れていけないのは、最終的には、自由と責任を持って子供あるいは若者が自らやり繰りしていくことを学び取る必要があるということです。

聖ホセマリアが言っていたように、 子供を本当に愛している親は、子供 たちにとっての善を誠実に探しないるもので、時宜に適った助言やける るもので、時宜には、子供たち がイスを与えた後には、子供たちの 持ってよる偉大な善である自き、 げないようにすっと身を引き、 げないまうにする が自由を用いて神を愛し神に仕る であるということです。

子供たちに対する親の威厳というものは、堅苦しさや上から目線というものとは全く異なります。そうではなく、良い模範に基づいたもので

す。両親が互いに対して持っているで情深さ、両親が大切なことで見れが大切なことでの親が大切な姿にではないる姿にはないのないではないのではないのでは、これらのはではでいるような模範が必要に対してはないでは、子供たちに対して接する態度が必要なのです。

このような親の威厳は、それぞれの 年代と状況に適っていると思われる 要求を、はっきりと妥協することな く彼らに求めていく態度によって示 されるものです。

ですから、威厳をもって教育すべき 人が、子供たちが苦しまないように という誤った口実のもとに、正すべ きところを正すという義務から逃げ てしまうということは、看過できな い無責任な態度であり、誤った安楽 さに流された態度であると言わざるを得ません[4]。親というものは、そ 供たちの弱さを理解してあげるとを明してあばると言わざる子問に威厳を持って接することを知たないのです。子供たがないればいけないです。子供囲気がないまっているとすればいないですという証拠なのです。

になっていき、その理由についても納得していくことができるのです。

人間として成熟するということは、 自分自身を客観視することがりることがりことであるということでもあってもあるということにない。最初の世界に囚われているものですが、自分が世界の中めるものですが、自分が世界の中がはない方ことに気がつきということに対して開かれていくことないであり、現実世界のではないであり、現実世界のではないであり、現実世界のではないであり、現実世界のではないであり、現実世界のではないであり、現実世界のではないであり、はないであり、はないであり、はないであり、はないでは、

成長するということは、たとえば兄弟のために自分のものを譲ること、誰かのために働くこと、学校も手伝されている仕事やお手を通しっかり果たすことを通し、親をもしていきます。ことをしないますることも大切な要素にこめような成長のプロセスは一人で歩

むことはできません。親の務めというものは、子供たちの一番良いものを磨いていくこと、それは往々にして多少の苦しみを伴うものです。

愛情と、想像力と剛毅の徳をもっ て、子供たちが堅固で偏りのない人 格を形成していくことを助けていく 必要があります。時間はかかるもの ですが、最初は全く理解できないと しても、子供たちはさまざまな人間 の行い、親に禁止されたり命じられ たりしていることの道徳的意味をよ り深く理解していくでしょう。その 時は苦しんだとしても、後になれ ば、ある時の親の厳しい叱責やはっ きりした言葉-それは怒りの結果で はなく愛の結果としての一に感謝す る時がやってくるものです。さらに は、親自らも子供たちからたくさん のことを学び取っていたことに気が 付くでしょう。

生きる力を育む教育

教育するということは、よく生きるということは、よと言えるということは困難備をして人生には困難にして、人生には困難にもないである。人間の目標を達成しようりはあり間である。であれば、子供たちがの物はいて、過程において、の過程において、の過程において、のでもなどを恐れる理由などを恐れる理点とを恐れる理点とを恐れるでしょうか?

お金を稼ぐことは骨が折れることや、自分より優れた頭脳や、財産や、社会的地位のある人と共に生きていくことを学ぶ必要があるで足やしいなあるいは人的な不足や制限を直視すること、価値のある必要があること、そして人生のもたららまざまな種類の失敗を体験する時、

全てがダメになったと諦めないこと を学ぶ必要があるのです。

子供たちが歩くべき道をできるだけ 平らにし、つまずきの小さなものすら避けようとする熱意を親が持つるとは、子供たちにとって善であるにとろではなく、彼らを弱いは他者との関係においてきっと出会うではなけてきっと対応していく能力をダメにしてしまうのです。

そして節制することを学ぶべきなのです。」 __と教皇ベネディクト16世が言った通りなのです。

子供からあらゆる困難を排除しようとする過保護な態度は、子供を周りの影響に対して無防備にしてしまいます。このような過保護は、本当の意味での教育と真っ向から対立するものです。

教育というスペイン語の単語 (educare)は、ラテン語の養い育てる(educare)、あるいは引き出す (educere)から派生していると出す していると違く素養をしているであた。最初の語源は、人格を提供である行為に関連しています。もらられているでは、芸術家が大理石の塊をあるに対しい彫刻を取り出すように、表音においても、教育においても、教育においても、教育においても、教育においても、教育においても、教育においても、教育においても、教育においても、ないでも、 いては自由が決定的な役割を果たし ます。

過保護な態度を取るのではなく、親 は子供に決断の機会を与え、その結 果を受け入れることで、小さな問題 を努力で解決できるようにする必要 があります。一般的に、教育的課題 の優先的な目的である個人の自律性 を高める状況を意図的に作っていく ことが望まれます。同時に、ここで 述べている自律性はそれを実行に移 す能力に見合ったものであるべきで あるということを忘れてはいけませ ん。まだ賢い使い方を知らないの に、経済的、物質的な手段を与える のは意味をなさないのは明らかで す。同じように、テレビやインター ネットの使い方を完全に彼らだけに 委ねてしまうのも意味を成しませ ん。さらには彼らがもっているビデ オゲームの内容について知らないと いうことも教育的に理にかなってい ることではありません。

責任感を子供に持たせる教育は、子 供が自由を味わえるように教育する ことのもう一つの側面ということが できます。自分がやったことを常に 正当化しようと必死になることは、 自らの誤りに対して責任を感じるこ とができなくなり、実際の自分の行 為に対する正当な価値判断を下すこ とを妨げてしまいます。その結果と して、物事を通して得られる自己認 識と経験いう不可欠の源泉から自ら を遠ざけてしまうことになるので す。たとえば、学業成績の不振を受 け入れる代わりに、教師や学校のせ いにして、人生に対して非現実的な 対応の仕方を彼ら自身のうちに形 作ってしまうのです。良いことにお いてのみ責任を感じ、あらゆる失敗 や誤りに対しては周りのせいにする のです。

このようにして常に文句を言い続けるような態度が形作られ、仕事の同僚や組織の在り方のせいにしていく

のです。あるいは、自分を憐れむような傾向や、未熟さの表れである手軽な気晴らしを探し求めることになっていくのです。

常に教育する

これら全て述べてきたことは何も思 春期や難しいことが起きる時期特有 のことではありません。あれやこれ やの什方で親は常に子供たちを教育 しているのです。親のあらゆる振る 舞いは決して教育に無関係なもので はなく、生まれたばかりの赤ちゃん に対しても既に大切なことなので す。ましてや4~6歳の「小さな暴 君」とも呼べるような世代の子供た ちは、自分の気まぐれで家庭を支配 してしまいかねない勢いをもってい て、親の教育力の限界を超えてしま うと思えるような時期においても、 あらゆる小さな親の行いが教育的に 大きな意味を持つのです。

ここで強調したいのは、親は今のた めに常に教育しているだけではな く、将来のためにも教育をしている のです。その場限りのある状況を解 決するだけのための教育で、未来を 何も見据えていないとすれば、ほと んど何の役にも立たないでしょう。 人間的成熟に不可欠な自立した人格 の形成が大切なのです。これ抜きに はあらゆる種類の依存状態から抜け 出ることはできません。はっきり目 で見てわかるような消費主義や性、 薬物などへの依存、あるいは見えに くい形ではあるけれどもその重要性 においては侮れない、流行している ある種のイデオロギーに起因するよ うな依存もあるのです。

家庭で子供たちが過ごす時間には限りがあるということをはっきりと意識していることは大切です。それだけではなく、このような時期においても、子供たちが親以外と過ごす時間は家族と共に過ごす時間よりもは

るかに長いものです。このような時間の貴重さが良くわかると思います。現代の多くの人々は、子供たちと過ごす時間を持つことに深刻な困難さを持っています。そしてまさに、それが原因で先に述べたような状況が生まれてきていると言えるのです。

実際、子供たちを見る時間がほんののませれば、子供たちで見る時間がほんできれば、子供なければ、ことはといることはちのことを要一に、子供たちのこれがいるのですが、ですがいいのであるができるがいいできる魔法はないのできる魔法はないできる魔法はないできる魔法はないのできる魔法はないのできる魔法はないのできる魔法はないのできる魔法はないのできる魔法はないのできる魔法はないのできる魔法はないのできる魔法はないのできる魔法はないのできる魔法はないのできる魔法はないのできる魔法はないのできるをするかさできる。

信頼に基づく教育

親の持つ権威というものは、子供たちに実際に感じ取られている愛情によってもたらされるものです。一般的に、親が子供たちに興味と関やといる時、そして何とかをして彼らのために時間を作ってくれる時、子供たちは本当に愛してもらっていると感じ取るものです。

ちを効果的に助けていくことができます。

幼い子供、思春期あるいは青年期に さしかかっている子供、それぞれの 年代の子供は、怒られたりしないか と恐れたりせずに、親と話すことを 必要としています。子供たちと豊か なコミュニケーションや対話が確か に保たれている時、どれだけ彼らの 人間形成に大きな助けを与えている ことか!聖ホセマリアは「常に両親 が子供たちの親友であってくださ い」ということを勧めていました。 父としての威厳、それは教育におい て不可欠ですが、それと、本物の信 頼に基づく子供たちとある意味対等 な立場に立ちながら築く人間関係つ まり友情は、完全に両立するものな のです、と教えていました。

子供というものは、反抗的だったり あるいは冷めた態度をとってりして いるにしても、親との緊密な信頼に 満ちた関係を望んでいるものです。 鍵を握っているのは、「信頼関係」 と言えます。親は家庭的な雰囲気の 中で教育することの重要性を知って おく必要がります。信頼が欠けているという印象を決して与えず、常に 自由を与え、個人的な責任を子供き 自身が感じながら自由を生きるよう にすることが不可欠です。

この信頼の雰囲気を常に醸し出すように努める価値があります。子供たちの言うことを信用し、不信感を抱

くことなく、ひとたびできてしまえば決して埋めることができないような不信の溝を許さないことです。

子供たちの世話をしている学校のとはでいる学校できるといる学校できることをできるといる。学校ではおいる。学校ではおいるではないではない。とはではいるではないではないではない。ではないではありません。いくないではありません。いくはいるではありません。の共同ではありません。の共同ではありません。の共同ではありません。の共同ではありません。のは、の世をを見ったがでは、一個性を必要では、信頼を増していくことが必要では、信頼を増している。

教育における家庭の重要性を受け入れる強いコミットメントが必要です。時間がないところから時間を捻出し、それを最大限に活用することです。これを達成するには多くの自己犠牲が必要ですし、多くの場合困

難を乗り越える必要があるでしょ う。ときには経済的な影響も受け入 れる必要があるかもしれません。し かし、本当の意味での人としての名 声というものをもっと幅広く捉える 必要があるでしょう。家族全体の善 を尊重する人間としてそしてキリス ト者としての名声というものがあ り、それは仕事における成功よりも 上位に位置しているものなのです。 ときにそれは表面的にそう見えるだ けなのですが、ともかく、この分野 においてジレンマに事欠くことはな いわけですが、それを信仰と祈り、 そして神のお望みを探求しながら解 決していくことが大切です。

希望の徳というものが親にはとても 必要となってきます。子供の教育と いうものは大きなやり甲斐を与えて くれるものですが、同時に小さくな い悲しみや苦しみをもたらします。 何が起きたとしても、失敗してし まったという感情に押し流されるわ けにはいきません。反対に、楽観的な見方を保ち、信仰と希望に支えられながら、常にやり直していくことができるのです。結果がなかなか出なかったり、あるいは全く見えなかったとしても、どんな努力も無駄になることはないのです。

(オプス・デイのホームペー掲載の 記事。原典はスペイン語。https://

opusdei.org/es/article/educarpara-la-vida/

- [1] 『聖ホセマリアとの対話』、100 番参照。
- [2] 原罪の教えについて。『カトリック教会の公教要理』、407番参照。
- ^[3] 『聖ホセマリとの対話』、104番 参照。
- [4] 聖ホセマリア『鍛』577参照。 「権威ある人が、のもしるというの説論を避けるとないの説論を追りが苦しみたくないの説論をしかが苦しみたは裏に安遺伝がいる。となるが、時にあることはであることはであることはであることはである。」 を強し、そのできはれんのではいるによってもらずでによってもらずことによった。した罪ではなってもらずことができる。」

^[5] 教皇ベネディクト、一般謁見、 2009年5月27日。<u>https://</u> www.cbcj.catholic.jp/ 2009/05/27/6663/参照

[6] 『聖ホセマリアとの対話』、100 番参照。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/ | kiru-Chikara-wo-Hagukumu-Kyouiku/ (2025/12/19)